慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	土井正興著 スパルタクス反乱論序説
Sub Title	Masaoki Doi, An introduction to the revolt of Spartacus slave army in ancient Rome, 1969, Tokyo
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.5 (1970. 5) ,p.410(58)- 413(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19700501-0058
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700501-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

土井正興著
『スパルタクス反乱論序説』

1.

古代ローマを震撼した「スパルタクスの蜂起」が，古代史においてどのような意義をもつか，これは古代史研究におけるもっとも重要な主題のひとつであったことはよく知られている。しかしこの反乱の真相は，それが古代ローマの社会体制を根底からゆるがした革命的な大事件であったがために，これを論ずる人々の階級的立場によってその評価はさまざまであり，当時の支配階級にとって都合の悪いこの蜂起に関する史料は不当に湮滅させられたこともあって，今日これを正しく解明することがきわめて困難なことであることは今更いうまでもなかろう。土井正興氏の「スパルタクス反乱論序説」は，この至難な問題に真向からとり組み，その真相の究明と未確定の部分ともいうべき歴史的局面について復元を試みると同時に，現代の革命的運動のなかに，その伝統がどのような形で継承され，脈々として生きつづけているかを明らかにした力作である。従ってそれは，古代史研究にかんするきわめて意欲的な労作であるとともに，著者はそれをもってまさしくそれ以後現代に至る革命の問題に答えようとするきわめて実践的な意図をもって試みたものであり，何よりも 1918 年ドイツ革命におけるローザ・ルクセンブルク，カール・リープクネヒトおよびフランツ・メーリンクを中心とするスパルタクス・ブントの革命的蜂起に大きな感銘をうけ，それから多くの示唆を与えられてこのテーマに接近されたことは，著者の「あとがきにかえて」から明らかである。

もとより筆者は西洋史を専攻するものではなく，まして古代ローマにかんしては全くの門外漢にすぎず，イギリスを中心とするヨーロッパ労働運動にきわめてわずかな認識をもつにすぎない。それゆえ，このような書物を紹介批評することは到底その任に耐ええないのみでなく，著者にたいして僭越且つ無躾けであることを想わないわけにはいかない。しかし私は，偶然の機会に本書を手にいれ，まず「あとがきにかえて」を読むにつれて筆者とまったく同じ時代に生きた著者の精神的苦悩と思想上の苦悶に共感するとともに，本書を読み了って，学問領域との関連から，著者の問題意識と完全に無縁ではないということを感じ，広く学生諸君にもこの力作の意義を認識させることの重要性を訴えるべく，敢えて紹介をさせていただく次第である。また筆者は労働運動を専攻するものとして，その立場からの感想をのべさせていただきたいと思う。著者の御教示をうれば幸である。

2.

本書は，つぎのような内容から成っている。

第1章　歴史におけるスパルタクス
第2章　スパルタクス反乱の思想史的意義——スパルタクス反乱の主体的条件について
第3章　スパルタクス反乱の社会経済的背景——スパルタクス再南下の問題をめぐって
第4章　スパルタクス反乱の政治史的意義
第5章　スパルタクス反乱の歴史的役割
あとがきにかえて——スパルタクスへの道——

まことに該博な知識と豊富な引用によって，スパルタクス反乱の真相に迫ろうとする本書は，その構成において独特なスタイルをもち，そしてまた文章そのものに何ともいえぬ個性が旺溢していることを感じさせる。それは著者の20年間にわたるスパルタクスへの傾倒の深さを示すものであり，おどろくべきことは，文学，社会思想および歴史にたいする関心の深さ，まさしく知的貪慾ともいうべきその豊富な実証と論理構造の巧妙さであろう。

第1章は，スパルタクス反乱がまきおこしたローマの支配階級の間における深刻な恐怖と，彼らによってその胸のなかに深く刻み込まれたスパルタクス像が，さらに古代末期，市民革命期および資本主義の発展というさまざまな社会発展の段階を通じて，どのような変遷をとげたか，とくにそれを支配階級の理論と被支配階級の理論の間におけるその把握の差異の対立的関係のなかで多くの史料を通じてとらえ，現代における国際共産主義運動の分裂とそれを反映するところのスパルタクス像の分裂との関係についてふれている。

第2章は，いわば「問題提起」ともいうべき部分であり，スパルタクズの敗因についての諸説の紹介にはじまる。すなわち，スパルタクス反乱軍の内部的不一致をもってその敗因の主要なものと考える定説を措定

し，さらにその不一致＝不和の原因を，①スパルタクスと奴隷大衆との間の矛盾，②スパルタクス軍内の民族的＝種族的対立，③スパルタクス軍に参加した奴隷と農民との不一致の3つの基本的に異なる見解に求める。あるいはこれらの複合的な把握もありうるが，これらの基本的諸矛盾の解明のために，スパルタクス軍の階級的構成を(I)奴隷，(II)自由民として把え，その上で複雑な民族的＝種族的構成を分析する（129頁以下)。このなかで著者は，スパルタクス軍の民族的＝種族的構成の分析によって，ゲルマン＝ケルト系民族がその大部分を構成していた事実を強調しつつ(137—140頁)，軍の最高議決機関としての軍会＝評議会の存在に注目し，古代ゲルマン社会，とくにガリア地方における原始共同体的規制および諸関係との関係において把握していることは，この反乱の歴史的意義を探る上にきわめて重要である。この点についてはのちにふれるが，ここでは，古代ゲルマンの原始共同体の構造についての著者の見解の詳細な叙述と諸家に対する批判として，155～160頁の註（102）の重要性を指摘するにとどめる。しかしより興味深いことは，以上の分析の上に立って，スパルタクス奴隷解放の途としての「二つのコース」，すなわち，それ自体，この奴隷蜂起の歴史的意義にかかわるところの反乱における基本的対立，ひとつは，イタリアを脱出して自己の解放をその祖国への帰還において見出す奴隷解放の方向，他は奴隷解放の要求の結果として出てくる奴隷王国建設への方向との矛盾の側面を指摘しつつ（167～174頁），スパルタクス軍を構成していた奴隷の非常に多くが，かつてケルト，ゲルマンおよびトラキアにおいて原始共同体的生活をしていた人々であったのであった」(177頁)事実からこのゲルマン的共同体への復帰の熱烈な願望，本来，反動的な心情ともみられる過去の原始共同体への郷愁こそが，実は奴隷解放の蜂起のための激烈なエネルギーたりえたのだとする著者の主張は，その文章のもつ気魄と相まって，異常な説得力をもってわれわれに迫ってくる。そして，この「二つのコース」の基本的対立点について，著者はさらにその分析を一層深めていく。つまり集団的な大規模な反乱＝奴隷所有者の打倒の途，それは本来，奴隷解放運動としてはまことに本源的なものであり，それゆえにまた自然発生的な蜂起として顕現するのであるが，それが支配階級の打倒から進んで，奴隷王国の実現，すなわち従来の支配階級＝奴隷所有者を奴隷とし，奴隷みずからが支配階級に転化するという「第1のコース」に進む場合。自然発生性による巨大なエネルギーの発現にもかかわらず，奴隷自身による自己解放は実現不可能となる。これに対して，スパルタクスによって提起された「第2のコース」，すなわちイタリア脱出＝祖国帰還による奴隷解放のコースこそが，真の奴隷解放を志向するものとして，スパルタクス軍内部においてはげしい内部闘争をまきおこし，「第2のコース」による「第1のコース」の克服のための努力を伴いながら，終局的には「第2のコース」が「第1のコース」との矛盾・対立関係のなかで，原始共同体への復帰という「復古的な」自由への希求と結びついていたにもかかわらず，奴隷解放の新しい途を確立したとして，そこに奴隷解放の積極的な意味を認め，その点を，中国共産党の「長征」に比較して，その積極的な意義が強調されている(191頁以下)。ただここで，第3章の冒頭において，ひとつの重大な問題を提起していることが印象的である。「しかし，ここで大きな問題となるのは，祖国帰還の実現をめざしたスパルタクスが，ローマ軍を撃破しつつ，イタリア半島を北上し，それを阻止するために，ガリア・キスアルピナ地方で迎撃したローマの将軍カッシウスの率いるローマ軍を敗走させ，そのことによって，アルプスを越えての故国への帰還がゲルマン人にとってもケルト人にとっても，トラキア人にとっても可能となったと思われたにもかかわらず，敢えてそれをおこなわず，再びイタリア半島に南下したことである。スパルタクスが，彼自身の提起した奴隷解放のコースをもっとも容易な条件下で，なぜこれを敢えておこなわなかったのか，この原因がわれわれに明瞭にしめされていないのである」(191頁)。

しかし筆者は，はじめでこれは少しおかしいと感じた。筆者は，「スパルタクス再南下の問題」をめぐって，恩師村川堅太郎氏の説をはじめ，諸説を検討し，いずれもこの問題に正しく答えていないとし，第3章全体がその真相の究明にあてられているのであるが，筆者はここに，著者のいう「アルプスを越えての故国への帰還が，ゲルマン人にとってもケルト人にとっても，トラキア人にとっても可能となったと思われたにもかかわらず，」（傍点筆者）という叙述に疑問を感じ，本書の欄外につぎのように書いておいた。「地理的条件はどうだったのか，アルプスの天嶮を越えることの困難さはどうだったのであろうか？　当時の状況下においてきわめて困難であったのではなかろうか？」と。筆者が何故このような疑問を，ここまで読んできたときに感じたがといえば，やはり「第1のコース」と「第2

のコース」との対立の問題にかかわってくる。すなわち，筆者も強調されるように，スパルタクス軍の構成が，ゲルマン人，ケルト人そしてトラキア人を主力とする原始共同体での生活体験を有し，これにたいする熱い郷愁に燃えた人により成っていたとすれば，彼らの祖国復帰への願望は何物にもまして熾烈なものがあったはずであり，たとえ峻嶮なアルプスも，もし越えうべきものならば越えようとして最大の努力を払ったはずである。もしそうでないとすると，「第1のコース」に対する「第2のコース」の優越性，奴隷制的な支配イデオロギーにたいする強力なアンチ・テーゼが崩れることとならざるをえない。そこで筆者は，何かここには伏線があり，地理的条件をはじめ，社会経済的諸条件がスパルタクス軍のアルプス越えを困難とし，その南下は，スパルタクス軍内部における第1のコースとの対立抗争をはらみながら，基本的に「第2のコース」の追求という方針のもとにつづけられたのではないかという推測をもって，それから先を読みつづけたのであったが，果せるかな，筆者の予測は，結論的には著者のそれと大体において一致するものであった。しかし第3章のこの論証の部分は，冬山を越えることの困難さの前に苦悩する古代の人々の悲しみが絶望となって今に聞えてくるような響きを含み，著者の迫力ある文章は被圧迫民族の立場から，この歴史的な悲劇を追跡しているのは印象的であり，本書の歴史書としての意義が，文学的関心によって一層深められている感じを与えられているといえよう。

「第2のコース」を追求するという基本的方針の確立は，アルプス越えの困難という状況のもとで，南下してシチリア島への脱出そして海路による帰国という闘いとなり，スパルタクス軍の首都ローマへの接近は，元老院を支柱とする大ローマの政局に重大な影響をあたえ，政局はローマの防衛とならんで，シチリア島渡航阻止をめぐって激化せざるをえない権力闘争となり。古代ローマ共和国は，やがて三頭政治をへて帝制への途を開くことになるのであるが，第4章は，このきわめて複雑な問題について詳細な分析を試みている。ここでは，問題の焦点ともいうべき前シチリア総督ウェルレースに対する裁判を中心にして，深まりゆくスパルタクス軍の脅威に対して元老院とスパルタクス軍との軍事的かけひき＝講和条約，ポエニ戦争以来のローマの都市国家から世界帝国への転化にともなう奴隷制の急速な発展と属州支配の問題を中心とするウェルレースの徹底的な搾取と収奪，これに抵抗して数次にわたる反乱をひきおこしたシチリア奴隷の不穏な状勢，しかも首都ローマにとって重要な食糧供給源としてのシチリアの地位を保全し，スパルタクス軍の脅威からこれを守ろうとする元老院の巧妙な政策は，一方においてスパルタクスとのみせかけの講和をおしすすめるとともに，他方においてウェルレースをして海賊とスパルタクス軍との同盟を絶ちきらせ，そのシチリア渡航を不可能とするための海賊の買収に特徴的にあらわれたのであった。一方，ローマの権力構造には，元老院議員のなかでの大土地所有者に対して平民および無産市民の不満が激化し，とくに「恥ずべき」奴隷との講和に責任を負う元老院に対する非難がはげしくなり，とりわけポンペウスおよびクラッススのコンスルへの非合法な選出によって不利な立場に追い込まれた元老院は，その権力を維持するために，ウェルレースのスパルタクス蜂起鎮圧やローマ市民のための食糧確保の貢献にもかかわらず，これを処刑することによってその権力の維持をはかるというようにまことに複雑な階級状況を呈する。著者は，この間の非常に錯綜した事情をきわめて明快に且つ論理的に整理しており，スパルタクス反乱の歴史的役割を論じた第5章とともに，本書におけるもっとも迫力ある部分をなしている。以上において，この労作の主要な問題についてふれたのであるが，もとよりこの大著の内容の意味するところを，このような短い紹介で尽すことができないことはもちろんである。ただ，門外漢にすぎない筆者が，これらの問題について考えるとすれば，つぎのような点について若干の疑問を感ずる。

著者の「スパルタクス反乱論」における基本的な姿勢は，現実の実践的な要求から出発してローマ社会の研究に沈潜し，そこにおける奴隷蜂起の中に現代の社会主義運動の問題を把握しようとすることであるかのようである。しかし本書をよんでいて感ずることは，この古代における人民の悲劇的な闘争を直接的に現代の問題に結びつけようとする態度があまりにも濃厚であるとはいえないであろうか。もちろんそのような姿勢そのものは充分に納得できるのであるが，たとえば，このスパルタクス軍の闘争を中国革命史上有名な長征と比較し，その両者の類似点と相異点とを分析しているが，筆者は古代社会における自然発生的な奴隷の蜂起を直接無媒介に帝国主義段階における民族解放闘争や社会主義革命運動と比較することには，非常に慎重な態度を要すると思う。著者ものべておられるように客観的条件が全く異なるのみならず，主体的条件

においても古代の奴隷と近代的なプロレタリアートとでは，むしろ質的に異なるものがあるからである。もしこの両者を比較するならば，著者はほとんどふれていないけれども，かの宗教改革と相前後して爆発したドイツ農民戦争に当然ふれるべきであった。奴隷身分からの解放は，こうした封建性に対する闘いを媒介にしてはじめて現代の問題につながりうるのではなかろうか。つぎにこれは全く素朴な質問であるが，古代の奴隷たちの闘争は，「当時の客観的条件のもとでは敗れるべくして敗れたのであった」が（394頁），このスパルタクスの反乱が，悠久な人類の歴史においてどのような意義を担ったかという問題である。著者も指摘されるように，そのきわめて直接的な結果は，奴隷制的な社会構成体の基礎を掘りくずし，奴隷制社会を変質させ……封建的なウクラードが奴隷制的社会構成体のなかから成長していくという結果をもたらした（387頁）。だがこのことを巨視的に拡大してみるならば，より進んだ社会構成体としての封建社会の萌芽は，ローマ帝国の版図からするならばいわば辺境の地ともいうべきガリア地方においてもっとも力強くあらわれたといわれる。スパルタクスの反乱は，この歴史的事実とどのようなかかわり合いをもつのであろうか。スパルタクスの蜂起は，敗れたとはいえ，悠久な人類の歴史において，古代社会を大きく封建社会の方向に推転せしめた決定的契機となったことはもはや疑いえない。そしてそのための条件も，ローマ周辺において一応もっとも早く整えられたにちがいない。それなのに，より高次の社会構成体の発生は，いわばローマからは僻遠の地ともいうべきガリア地方にみられたのは何故か。そしてこのような歴史的事実にたいして，スパルタクスの反乱はどのような位置づけを与えられるのであろうか。

以上，この意欲的な力作にたいしてまことに蕪雑な紹介および批評を試みたのであるが，著者の意図を正しく汲むことができず，思わぬ誤解をおかしていることがあるかもしれない。著者の御寛容をまつのみである。同世代に育ち，苦しみ，傷つきそして闘ってきた著者にたいし，心からなる共感を禁じえないものがある。労働運動史や社会思想史を専攻する諸君はもとより，社会経済史に関心をもつ多くの塾生諸君に本書を推奨したい。（法政大学出版局，1969年刊，A5，414+63頁，1,800円）

——1970. 3. 22. 深更——

飯田　鼎

游　仲勲著

『華僑経済の研究』

東南アジア諸国の経済構造分析に華僑の役割を欠くことが出来ないと同様に，中国経済の，特に旧中国資本主義の発展とその半植民地的規定の下におけるモディフィケーション，ひいてはその社会主義経済への移行について，華僑の分析を欠くことの出来ない意味を人々はあまり知らない。又，帝国主義段階における労働力移動の問題として華僑問題は不可欠のウェイトを持っている。本書は，“華僑経済”をその実態分析に副いながらたえず経済学の基礎概念に立ちかえって検討し，従来の法制的，民族的，社会学的分類と解説を超えて，帝国主義論をふまえた構造分析の中に“華僑問題”を位置づけることを試みた，一つのフレームワークである。

著者は，先ず華僑の概念規定を行って従来のあいまいな問題設定，接近方法を批判し，「帝国主義段階，特に第二次世界大戦後における世界的な植民地体制の崩壊過程において華僑をめぐる諸矛盾が華僑居留国，ことに東南アジア諸国の民族問題の一つとしてその最も重要な構成部分の一つとなったという現実こそが最も本質的な側面として重視されねばならない点である」と考える（12頁）。それは「華僑の発生そのものが実はアヘン戦争以後，ことに帝国主義段階にいたって生じたのであり，その相当の部分が中国民族として海外に移住し」（13頁），かれらの多くが移住した東南アジア諸国で，帝国主義による分割統治の原則のもと中国民族としてとどまり，土着民族と混融しないことを強制され，いわゆる華僑という特殊な存在を形成するに至ったとみられるからである。

書物は，第1章　序説的諸問題，第2章　華僑経済の型と産業構造，第3章　華僑経済の商品経済的特質，第4章　華僑経済における資本主義の発達，第5章　華僑資本の推定，第6章　華僑企業の特徴，第7章　華僑社会経済組織，第8章　華僑社会の階級構成，第9章　華僑社会の経済的支配，第10章　居留国政府の対華僑経済政策，から成っており，それぞれの章で事実の掌握，視点別の類型化，理論化が行われて興味深いが，ここではいくつかの問題点に集約して考えてみたいと思う。